

第31回 小中高生親善ソフトボール大会

1ページ続き



ソフトボール大会小学生チーム観戦記

一つのソフトボール大会ではあるが、コロナ後最初の大会となると一言では語れない。昔から甲子園が好きな私は、今回のソフトボールもつい甲子園に重ねてしまう。2022年夏の甲子園、締め括りに東北勢初優勝をもたらした仙台育英須江監督のスピーチが話題になった。「今の中高生生活は大人たちが過去に過ごしてきた高校生活とは全く違う。青春はすごく密だが、それが全部ダメだと言われる苦しい中、諦めずに頑張ってきたすべての高校生に拍手してもらいたい」という内容に私自身も心を打たれた。

コロナで中断し、3年ぶりの開催となったソフトボール交流試合。参加した小学生メンバーたちは甲子園球児同様に誰も経験したことのないコロナ禍での小学校生活を乗り越え、短い練習期間の中で徐々に「チーム」を創り上げてきた。本人たちにとっては当たり前の毎日かもしれないが、きっと私たち大人とは違う何かを体得しているのだと思う。

さて前置きが長すぎたが、肝心の試合はどうだったのか。一言で言うならば「素晴らしいものを見せてもらった」である。監督・コーチたちが熱心な指導をしてきたとはいえ、ヒューストン小学生チームはメンバーも入れ替わり、数か月でどうにか新たに創り上げた言わば即席のチームでもあった。人数では大きく水をあけられているダラスチームに対し、試合になるのだろうかという懸念もあったが、蓋を開けてみれば大熱戦。彼らがヒューストン小学生チームは低学年が27-3の快勝。男女Mixが11-12の惜敗。高学年が14-10の勝利という堂々の結果を残した。

低学年はとにかくよく打ち、よく走った。守備でも小学生とは思えないようなフィールディングでアウトを取ることもあれば、互いにカバーし合って必死にボールを止めて失点を最小限に抑えた。走攻守が噛み合った勝利だった。

男女Mixでは相手が攻守ともに良いリズムで圧倒していた中、我慢しながらも徐々にペースをつかみ、得点チャンスを着実に掴みながら同点に追いつき試合を振り出しに戻した。最後はサヨナラの失点となったが、誰も諦めないからこそ接戦となった美しい試合だった。

高学年は前半相手の得点が積み重なる中、なかなか加点できず。差が徐々に広がり敗色が見え始めたとき、一つの好守備、一つのヒットから流れを徐々に引き戻した。1点リードで迎えた最終回裏の相手の裏の攻撃。早々に1失点し、あと1点でサヨナラ負け且つ満塁のピンチという場面を見事に抑えて同点で終了。そこで「折角なのでもう1イニング」となり、流れをつかんでいるヒューストンチームが5得点をあげ勝利を決定づけた。

いずれのチームもスコア以上に素晴らしいのは皆が互いによく声を出し、互いに前向きに励まし合い、どこで教わったわけでもないのに「チームワーク」を自分たちで創り上げ体现していたことだった。

この交流戦の開催にはコロナに加え、当日まで天気というハードルが立ちはだかった。直前の大雨により開催が危ぶまれ、何とか回復した当日も途中から雷や降雨により中断するなど何度も中止の可能性が出たが、驚くことに最後まで大会を完遂することが出来た。同時に頃、車で20分程度先のダウンタウンでは記録的な嵐で木が何本もなぎ倒され広範囲で停電になったとの被害状況をきくと、我々がいかに幸運だったのかに気づかされる。小学生たちの大きな声と楽しんでいる思いが悪天候も跳ね除けたのだろうか。試合を終えて汗と土にまみれ『球友』たちと抱き合う小学生チームの充実した表情を見ていたら、早くも来年の試合がもう楽しみになってしまった。

様々なハードルがある中、本大会開催の実現に尽力頂いた関係者の皆様、当日応援にお越し頂いた岡林校長先生ご夫妻、監督・コーチ、応援してくださった保護者や先生の皆様に改めて感謝の意を表したい。

(松崎文吾)



ソフトボール大会中高男子チーム観戦記

2019年にヒューストンで繰り広げられた暑い熱戦から3年、コロナ禍を克服して31回目の親善試合を開催することができた。中高生もこの2年の間に多くのメンバーが帰国し、選手の人数不足が心配されたが何とか12名の選手が集まつた。皆少ない練習量ながら根気強く毎週末の練習を重ね、期待に胸を弾ませてダラスに乗り込んだ。

ダラスとの事前打ち合わせで中高男子の試合については、3年ぶりの交流を趣旨として混成チームで1試合だけ行うことになった。試合前に互いの選手が一緒にキャッチボールやバッティング練習で打ち解け、キャプテン同士でチーム分けをしてプレイボール。

試合が始まるとヒューストンの選手たちは野球経験者の多いダラスの選手に圧倒された様子で緊張からか少し動きが硬い。しかし大きなレフトフライ

を川畠がファインプレーで見事キャッチしたのを皮切りに、ヒューストン選手のファインプレーが続出。練習では見られなかった軽快なゴロ捌きやスムーズな送球、バッティングでもヒットを連発して底力を見せつけた。そのたびにダラスの選手と笑顔でハイタッチする様子は何とも微笑ましい光景だった。今年の復活戦を機に、選手たちの更なる成長とチームの飛躍を期待したい。

(赤毛 孝)



ソフトボール大会中高女子チーム観戦記

3年ぶりとなるソフトボール大会の試合開始を告げるサインが(筆者の頭の中で)高らかに鳴り響いた。コロナ禍の中でも消えずについた多くの方々の熱い思いが結実した瞬間である。我らが中高女子H軍は1回表4番オーデリーが先制点を挙げ幸先の良いスタートを切る。追いつかれた3回、咲乃、杏、萌乃香の怒涛の連続ヒットで満塁とした後、オーデリーが追加点。続く心美が2点適時打。さらに、鈴子、桜香が1点ずつを加えビッグイニングとなつた。ここでストームにより試合中断。5回までの短縮試合となる。5点を返されその差1点となつた5回表、真柳がライト前安打するも後続が倒れ追加点とならず。助っ人選手明日香・マッキー・ワッキーを迎え挑んだが、最後はD軍に点差を縮められ逆転負けを喫した。一歩及ばず7-8と悔しい敗戦となつたが、手に汗握るとしても良い試合展開であった。主将萌乃香が安定した投球でチームを牽引。全選手が積み重ねてきた練習の成果を遺憾なく発揮し、全員安打。華麗なダブルプレーも披露した。

継続は力なり。心一つにまた練習を重ね、来年のリベンジに期待したい。嵐による中断後、試合は再開された。そう、止まない雨はないのだ。来年以降も伝統あるこの素晴らしいイベントが連続と続いていることを切に願うばかりである。

文末となりましたがご尽力賜りました運営関係者の皆様、選手そしてご家族の皆様のご協力に厚く御礼を申し上げます。

(樽谷真治)